

ろうの子をもつ健聴の親が 第二言語として手話を学ぶ際の成功の鍵を探る

デボラ・チェン・ピクラー
(ギャローデット大学 [アメリカ])

要旨

聴者である学習者 (M2L2 話者とも) による手話言語習得の研究はここ 10 年あまりで主にイギリスとアメリカで飛躍的に増大しており、他の国々においてもその数を増やしている。この多くの研究による成果は、成人の第二言語の発達過程や、それが伝達モードによってどのように影響されるかについての現時点の想定を精緻化することに貢献している (Chen Pichler and Koulidobrova 2016)。

しかしながら、現存する M2L2 話者の研究の焦点は、「典型的な」状況の、高校生や大学生の個人的な関心によるアカデミックな設定での手話学習にほぼ限られている。本発表ではこれとは対照的に、家庭の環境で、関心よりも切迫した必要に迫られて手話を学ぶ、ろう者である子どもの親に焦点を当てる (Napier et al. 2007)。早期に手話言語に触れることが、ろう者である子の言語的な、また認知的な発達において言語の欠損のマイナス効果を防ぐ点で決定的な役割を果たす (Morford and Mayberry 2000) ことを考慮すれば、これは極めて得るものの多い試みである。しかし、聴者である親の手話言語の発達の記録は稀であり、アメリカにおいては、ろうの子を持つ聴者の親の、限られた需要に応えるようなアメリカ手話教育の標準的な「家庭用カリキュラム」は存在しない。本発表では、ろうの子を持つ聴者の親の手話話者に対するインタビューの最初の成果を (a) アメリカ手話を学ぶことに対するプレッシャーにも関わらずなぜこれを学ぶようになったのか、(b) アメリカ手話を学ぶのにどのようなリソースを使用しているか、(c) アメリカ手話のどういう点がかつとも難しい、もしくは直感的に可能かについての彼らの反応、に関して報告する。我々は、ろうの子に対する早期介入プログラムを介して手話話者の親を募集した。インタビューした家庭のほとんど全てのろうの子が、人工内耳のインプラントを受けるか予定していた。アメリカ手話に対する盛んなプレッシャーにも関わらずなぜそれを選択したのかという問いに対しては、人工内耳のインプラントを待つ間にも子供とコミュニケーションする方法がほしいという声がよくきかれた。しかし彼らの動機づけは単に実用本位というだけではなかった、というのは、アメリカ手話と英語とのバイリンガルとして、彼らの子どもも彼ら自身も成長したいという長期的な希望も表明されたからである。残念ながら、ほとんどの家庭では、アメリカ手話の教師かろう指導者の家庭訪問を週に 1、2 時間しか受けられていないので、親たちは自身のアメリカ手話の習得の進展については、夜間クラスやオンラインや DVD など学習を補っていてさえも難しいことを報告した。それでもなお、この聴者である親たちは、アメリカ手話と英語の言語学的

な構造に対して、アメリカ手話の最も習得が難しい点である語順についても、また比較的学ぶのが易しい語彙の点でも驚くべき洗練された反応を見せた (Snoddon 2015)。

インタビューはまだ続けられているが、これまでに出了たパターンが、親であるアメリカ手話の学習者として成功している人のプロフィールを形成するために、また彼らがアメリカ手話を家庭言語として選択する動機づけとなった要素として、そして彼らの学習を支える実践として、既に啓発的なものとなっている。ろうの子をもつ聴者の親の大部分が、子どもと手話で話すことを力づけるストラテジーを発展させるためにも、このような要素を記録することは大切な第一歩である。

参考文献（一部）：

- Chen, P. D. and H. Koulidobrova. 2015. Chapter 14 Acquisition of Sign Language. *The Oxford Handbook of Deaf Studies in Language*, 218.
- Mayberry, R. I. and E. Lock. 2003. Age constraints on first versus second language acquisition: Evidence for linguistic plasticity and epigenesis. *Brain and language* 87(3), 369-384.
- Napier, J., G. Leigh and S. Nann. 2007. Teaching sign language to hearing parents of deaf children: An action research process. *Deafness and Education International* 9(2), 83-100.
- Snoddon, K. 2015. Using the Common European Framework of Reference for Languages to teach sign language to parents of deaf children. *Canadian Modern Language Review*, 270-287.